京都大学	博士（文学）	氏名	小林　敬
論文題目	シモーヌ・ヴェイユの哲学 ―フランス反省哲学の発展的展開としてのヴェイユ思想―		

（論文内容の要旨）

本論文は、シモーヌ・ヴェイユ（Simone Weil, 1909-1943）の思想を、フランス反省哲学の思潮上に位置づけて把握し直すことを試みるものである。

ヴェイユが晩年の数年間に書き残した、政治や社会の具体的諸問題と不可分な仕方で展開される自己無化を基調とした宗教的言説は、しばしばキリスト教（カトリック）的神秘主義思想と評される。また、初期および中期の旺盛で活動的な労働問題への献身や社会活動・思想も知られており、サンディカリストにして闘士としてのヴェイユの姿もよく知られるところである。こうした種々のヴェイユ像は多くの人々の関心を引きつけてきた。それに対して、彼女の思想自体がいかなる哲学的背景を有しており、いかなる必然性が彼女の思想を規定しているのかといったことは、表立って論じられることが少ないように思われる。また、晩年のヴェイユの神秘主義的と評せられるような思想が、それ以前の一見主知主義的に見える彼女自身の態度といかなる関係にあるのかということ、すなわちヴェイユにおける初期・中期と後期との思想的連続性の有無をめぐる問題は、ヴェイユ研究において今なお解決されていない。

本論文は、ヴェイユの哲学者としての立場を検討することによって彼女の哲学史上の位置づけを論じると同時に、ヴェイユ思想の内部に存する初期から後期にかけて思想的展開の問題にも一つの解決を与えることを目的とする。そのために、彼女の思想形成期における師アランの影響を検討し、それを通してヴェイユ哲学をフランス反省哲学との連関のもとに位置づけて考察するというアプローチを採る。とくにフランス反省哲学の中のラシュリエ、ラニョー、アランからヴェイユへと至る流れに目を向け、彼らが共有する方法や問題意識を同定することによって、この埋もれた潮流の独自性とその思考の射程を示すことを試みると同時に、ヴェイユに思想史上の位置を与えることを試みる。それを通して、ヴェイユの初期・中期思想と後期思想の連続性あるいは非連続性の問題を、フランス反省哲学がその内部に含んでいる問題系との連関で把握し、彼女の思想の初期から後期に至る展開をフランス反省哲学における反省の二義性の問題の展開として解釈する可能性を提示することが可能になると考える。

本論文は三章からなる。まず第一章でヴェイユの初期・思想形成期の諸テクストを取り上げ検討することによって、初期に形成された彼女の哲学的立場の確認を行う。ついで第二章で、ヴェイユが思想形成期に多大な影響を受けたアラン、ラニョーらの立場と彼女の立場とを比較し、哲学者としてのヴェイユの自覚的な位置づけを論じる。さらに、ヴェイユの初期の哲学的立場が後年に至って変化するか否か、変化があ

るのであればどのような点においてであるかをも論じる。第三章ではラニョー、アラン、ヴェイユと継承される思潮に固有の性格を同定するために、アランおよびラニョーの「反省的分析」を検討する。さらに、この「反省的分析」において参照軸となっているスピノザに対して、彼らが共通に有している一定の距離の取り方に着目し、ラニョー、アランからヴェイユにいたる思考の特徴を同定することを試みる。

第一章：初期・思想形成期のシモーヌ・ヴェイユ

まず、最初期にあたる高等師範学校準備学校・高等師範学校時代（1925-1931）に目を向け、ヴェイユの思想形成期のテクストの検討を行う。彼女の「哲学」的骨子は、アランの強い影響下にあったこの最初期に形成された。当時のヴェイユの諸論文から彼女の「労働」概念の形成過程を辿ると、その「労働」概念がアラン哲学を下敷きにして形成されていることがわかる。アランにおける精神と世界という二項の対立的関係を、ヴェイユは知覚論および認識論において自ら辿り直すことで、〈精神としての自己〉と〈対象としての世界〉の両者を一挙に把握し現前させる唯一の契機としての「労働」概念を提示する。これはアランの意志および行為の哲学を下敷きにした議論であり、ヴェイユにおける「労働」概念の形成過程は、〈世界―自己〉関係を「行為」においてとらえるアラン哲学――この「行為」は抵抗としての対象を現前させる努力的行為であるがゆえに「労働」と呼ぶことがふさわしい――を、忠実に受け継ぎ、自らのものとしてゆく過程であったといえる。

本論文では、中期以降のヴェイユ思想の具体的な展開を検討することはできなかったが、こうした「行為＝労働」の哲学を、ヴェイユがアランおよびラニョーにならって知覚論（認識論）と不可分に成立させていることは、中期以降のヴェイユにおける「労働」や「行為」の問題を検討する際にも見落としてはならない事実であろう。〈世界―自己〉関係を認識論的枠組みから検討してゆく際にヴェイユが狙いとしているのは、単に認識の構造を明らかにすることではなく、「行為」における人間的自由をその原理から確保することでもあった。こうした認識論と行為論の密な連携こそ、ヴェイユがアランに範をとっているところなのである。

第二章：ラニョー、アラン、シモーヌ・ヴェイユ

本章からは、上記のようなアランの哲学自体が、アラン一人のものではなく、彼の師のラニョーから受け継がれた哲学史的背景を有するものであることを示していく。すなわち、ヴェイユがアランから継承した認識論と行為論の結合体は、アラン自身が師ラニョーから受け継いだものであり、より広範にはメーヌ・ド・ビランに端を発する「フランス反省哲学」の流れに位置するものである。ヴェイユは、自身の「労働」の哲学を形成してゆくにあたって、直接にはアランに学びながらも、たびたびラニョーの知覚論（認識論）を参照し、かつその背景にカントの分析論を見出している。ここからヴェイユがカントのフランス的受容を参照軸とした「フランス反省哲学」の流

れを強く意識し、それを範として思索を展開していたことが見てとれる。ヴェイユはこうした「フランス反省哲学」の流れを自覚的に引き継ぎ、自らの思索をその末端に位置づけようとしていたと言えるのである。

こうしたヴェイユ自身の立場は、初期や中期に限定されるものではなく、後期にいたっても一貫して保持されていると思われる。ここから従来問題となっていたヴェイユの初期と後期の連続性・非連続性の問題に対しても、ひとつの回答を与えることができるだろう。実際、『重力と恩寵』や『神を待ちのぞむ』所収のテクスト類が書かれたマルセイユ時代を経たのちも、ヴェイユはビランに連なる「ラニョーとアランの知覚の理論」が、宗教的に見える自らの諸考察と密に連携していることを認めている。このことからも、後期までのヴェイユの全著作をフランス反省哲学のヴェイユ的展開として受けとめ、その筋道において解釈していく必要性が確証されるのである。

第三章：「反省的分析」における二義性―ラニョー、アランからシモーヌ・ヴェイユへ―

では、フランス反省哲学の「ヴェイユ的展開」とはどのようなものであるか。それを特徴づけるためには、ラニョーとアランが自らの思索方法とした「反省的分析」を精査し、彼らからヴェイユへと至る一思潮の基本性格を掴み出す必要がある。「反省的分析」という名称はスピノザに倣って名付けられたものであるが、その内実を検討すると、そこには共通してスピノザに対する一定の距離の取り方が存していることが見出される。そこで彼らは、スピノザに範を取りつつも、最終的局面でスピノザ的であるよりもむしろ「デカルト的」であることを選択するような態度を選び取るのである。こうした態度は、「知」の最終的局面において「行為」へと必ず回帰し、精神および世界を「行為」における両者の緊張関係においてのみ把握しようとするという姿勢と連動している。この姿勢は彼らの「現実存在」の把握の仕方に如実に現れている。つまり、外的世界としての「現実存在」は、あくまで精神に抵抗するその質量・物質性において把握される。「現実存在」はつねに〈自己―世界〉の緊張的関係においてわれわれに迫ってくるがゆえに、その知覚の反省的深化は、行為を通して世界に変容をもたらし、それと相関して自己自身に変容を迫るような「試練」として受けとめられるのである。

こうした彼らの「現実存在」観は、つねに抽象ではなく具体的で実在的なる行為を要請し、単なる知ではなく行為における変容の事実を要請するものとなる。そしてここには、行為における自己と世界の変容が〈事実〉であると同時に〈課題〉として自覚されるという、反省的自覚の二義性が存している。これこそがヴェイユがラニョー、アランを通じて継承した問題系なのであり、上記のような文脈でヴェイユ思想全体を把握し直した場合に、ヴェイユの初期・中期から後期にかけての「転換」の問題もまた、「フランス反省哲学の発展的展開」として解釈される可能性が拓かれてくる

のである。

（論文審査の結果の要旨）

シモーヌ・ヴェイユ(1909-1943)は、先鋭的なマルクス主義批判を含むラディカルな政治・社会哲学と、晩年における破格の宗教思想、およびこれらを背景として現実世界の問題へと自己犠牲的ともいうべき尋常ならざる仕方で関与するその行動によって知られるが、「二人のヴェイユ」とも言われるその思想の両面の関係、さらには思想と行動との関係を適切に理解してその全体像を描きだすという課題は、これまでのヴェイユ研究において十分に果たされてきたとはいえない。その理由の一端は、ヴェイユの著作として流通してきたテクストが、カミュやティボンら第二次大戦後にヴェイユを世に送り出した編者たちの介入により大きく方向づけられており、それがその後のヴェイユ像の形成に決定的な影響を及ぼしてきたことにある。だが、1988年以来ガリマール社から刊行されてきた批判校訂版全集の大半の巻が出揃った現在、テクスト状況は劇的に変化し、それに基づいた新たな研究が進行しつつある。本論文は、こうした状況を踏まえて従来のヴェイユ像の根底的な書き換えを企てた意欲作である。

従来のヴェイユ理解は、後期のキリスト教への接近とそこから生まれた唯一無比の個性をもつ宗教的言説の衝撃を軸として、そこにそれまでの彼女の思索からの断絶や立場の転換を見ることを自明の前提としてきた。そしてこの転換は、学生時代から圧倒的な影響を受けてきた師アランからの離反、および哲学それ自体からの離脱と重ねあわされてきた。だが、新たなテクスト状況の下でヴェイユの著述を吟味し直すならば、この転換をも初期から一貫した哲学的思索の延長上に位置づけて解釈する可能性が開けてくるのではないか。そのような可能性を開くことによって、ヴェイユ思想の宗教哲学的理解を一新するための準備作業を遂行することが、本論文の主たる狙いである。

ヴェイユの内に初期から一貫する哲学的思索を見定めようとするこの企ては、ヴェイユに対するアランの影響を従来よりも大きく見積もることを意味する。そのためにはヴェイユの思索様式の源泉としてのアランの哲学についてもまとまった形での理解が必要になるが、短い「プロポ(propos)」を書き連ねて独自な様式で思索を展開し続けたアランについてそうした理解を打ち立てるのは簡単ではない。そこで本論文は、アランの師であるラニョーへとさらに遡り、メーヌ・ド・ビランを源としてラシュリエからラニョーへと受け継がれてきたフランス反省哲学の系譜にアランを置くことでその思索の基本性格を浮き彫りにする。その上で、アランからヴェイユへの師弟伝承が同時にこの系譜自体を引き継ぐ形でなされていることを両者のテクストの詳細な読解を通して示すことにより、ヴェイユの哲学的思索の一貫性を「フランス反省哲学の発展的展開」として位置づけようとする。フランス反省哲学という隠れた思想潮流自体の研究がごく少ない中、この潮流を再構成しつつアランとヴェイユの哲学に通底する根本特徴を掴み出したことは、本論文の方法論が可能にした独自な貢献である。

本論文が明らかにした点のうちで、とくに評価すべきものは以下の3点である。

１．高等師範学校時代の最初期の論考をその異稿に至るまで精緻に読み解き、そこで

浮上してくる「労働」概念の形成過程を解明したこと。これによって、ヴェイユが政治思想の形成に進む前に学位論文のデカルト論で展開していたこの概念が、それ自体アランのデカルト論に大きく依拠したものであり、知覚論と想像力論を場面としてデカルトとカントを連結した上でそれを行為論として展開する個性的な行論を下敷きにしたものであることが示された。

２．１を軸としたヴェイユの哲学的思索が後期においても保持されていることを、宗教色を鮮明にする晩年のマルセイユ時代のテクストの周到な読み直しを通して証示したこと。その際、この時期のヴェイユがアランから離れ、アランの方でもヴェイユを批判していたという通説を覆す資料を双方の側から掘り起こし、後期ヴェイユ思想をもアランからの連続性の下で受け取り直す可能性を開いたことは、今後のヴェイユ研究への重要な貢献となりうる事柄である。

３．２のアランとヴェイユの連続性を裏支えするものとして、フランス反省哲学の思考方法としての「反省的分析」の根本性格を描き出した上で、その末流に位置づけられるヴェイユの後期宗教思想もまた、この思考方法の発展的展開として位置づけうるという可能性を示したこと。とりわけ、反省哲学の眼目が、「現実存在(existence)」の仮借なき必然性を一切の仮象を剝ぎ取った所で知覚し、そのこと自体を反省的に深化させていくことで反省主体の自己離脱的変容をもたらしていくことにあることを確認した上で、後期ヴェイユの鍵語である「離脱(détachement)」や「浄化(purification)」をその延長上に位置づけるという道筋を示したことは、創造的なヴェイユ解釈であるだけでなく、ヴェイユから引き出しうる宗教哲学の独自の可能性を示唆するものとして高く評価できる。

とはいえ、評価すべき所の多い本論文にも、なお十分ではない点がいくつかある。第一に、フランス反省哲学の系譜とアランからの連続性を浮かび上がらせることに注力するあまり、この構図の中でヴェイユの思索を先行者と分かつ独自性を描き出す作業がやや手薄になっている。また、それと連関する事柄として、ヴェイユの哲学的思索の軸となりうるものとして労働の概念を取り上げながら、この問題を政治・社会思想の文脈で鋭く論ずる中期ヴェイユのテクストに触れなかったことは、片手落ちといわざるをえない。しかし、こうした問題点は論者自身も自覚している所であり、本論文の達成を土台とした次の段階の研究によって克服されるものと思われる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。２０２２年２月１５日、調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。